



京大広報

No. 715

2015.10



第1回京都こころ会議シンポジウム「こころと歴史性」を開催 —関連記事 本文4518ページ—

目次

〈巻頭言〉

40年前の留学
研究・企画・病院担当理事・副学長 湊 長博
.....4506

〈大学の動き〉

理事の交替等について.....4508
副学長が発令される.....4508
理事補が発令される.....4508
博士学位授与式を挙げる.....4508
全学教育シンポジウム「京大流・未来を拓く人の
育て方」を開催4509
第53回近畿地区国立大学体育大会に出場.....4510
山極壽一 総長が第3回日越学長会議に出席
.....4510

〈寸言〉

「文化経済大国」を目指そう
大竹 伸一.....4512

〈随想〉

野生動物問題雑考
名誉教授 渡邊 邦夫.....4513

〈洛書〉

人が火山に合わせるしかありません
中道 治久.....4514

〈話題〉

第8回次世代グローバルワークショップを開催
.....4515
第3回高校生のための夏期セミナー「漢字文化
への誘い」を開催4515
2015年国際土壌年記念巡回展『土ってなんだろ
う?』を開催4516
サマースクール「東南アジアの再生可能エネル
ギー開発」の研修をチェンマイ(タイ)で実施
.....4516
第70回京都大学原爆災害総合研究調査班遭難者
の慰霊の集いを開催.....4517
第1回京都こころ会議シンポジウム「こころと
歴史性」を開催4518
〈訃報〉.....4519

巻頭言

40年前の留学

研究・企画・病院担当理事・副学長 湊 長博

この4月に久しぶりに私の師匠のBarry R. Bloomが来日した。10年間のHarvard大学 School of Public Healthの学長を2年前に終えて少しは楽になったらしい。丸一日のんびり二人で京都をぶらぶらできた(残念ながら、亡くなられた奥様Ireneに昔かんざしを買ったという店は見つからなかったが)。私がBarryの研究室へ留学したのはもうかれこれ40年近く前のことになる。今、大学で最もポピュラーなキーワードは「グローバル化」である。学生はまず英語力を問われ、とにもかくにも海外留学を勧奨される。ここでこんな昔の留学話などとんだ的外れかもしれないが、こんなものだったということだ。

学位詐称？

Barryに初めて出会ったのは医学部5回生の時(1974年)である。学生が研究室へ勝手に押しかけ実験をやらせてもらうのは当時珍しくもなく、私も講義に出るより実験をしている方が多かった。3回生の頃からBarryの論文を参考に自己流に実験をしていたが、たまたま当の本人が来日するという事を知り実験結果を添えて手紙を書いたら(Eメールなどまだない)京都で会おうという返事が来た。京都で昼飯をごちそうになり随分話をした。別れ際に将来何を研究したいかと聞かれたので当時ポピュラーではなかったが「ガン免疫」の研究がしたいと答えたら、では卒業したらすぐNYへ来いといわれた(当時彼はEinstein Medical Schoolの免疫学教授)。せめて臨床研修くらいはやらせてほしいと頼み、2年の卒業インターン終了と同時にNYへ渡った。1977年、26歳の時である。自分の身分や給料のことは全く考えていなかったが、渡航後初めてMD PhD Research associateという身分(つまりポストク)で給料は無税の年俸13,000ドルだと知った。1ドル360円の時代で生活には充分以上だった。やがてBarryの秘書が、京大へ照会してもあなたの学位登録がないということがどうなっているのかと言ってきた。そもそも大学院を「はしょって」いるので当たり前である。Barryに



相談すると、なんでもいいから日本語のそれらしいペーパーを出しておけと言うので医師免許証のコピーを出したらOKとなった。冷静に考えるとこれはどうみても「学位詐称」だが、そもそも向こうの都

合？だし、もう40年近く前なので時効だろう。帰国後早々に、NYでの仕事で京大の医学博士を取った(一応念のため)。

出番ですよ

NYでの最初の1年は研究テーマで悩んだが、Barryは好きなことをやっただけというだけで取り合ってくれない。そうこうしているうちに突然、UCSDから赴任したLola Reidと話をこいという。免疫不全のはずのヌードマウスを使って必要なガン細胞を増やしたいのに不思議なことに拒絶されてしまうと悩んでいる、この謎を解くのが君のテーマだと。ようやく「出番ですよ」というわけだ。京都での話を覚えていてくれたのかと聞いたらキョトンとしていたが、ともあれテーマは決まった。その後の丸2年余り、週7日毎日14~15時間研究に没頭しそれなりに答えを見つけた。これがガン免疫の新しいメカニズムの発見につながった研究で、現在では教科書にもちゃんと記載されている。よくもあんなに働けたものだと思うが(Lolaは現在North Carolina大学の教授、会うたびに、あの頃のあなたはまるでデータマシンだったわね、と笑う)、これがその後の自分の研究のスタイルを決めたと思う。答えは自分の頭ではなくマウスの体にある、マウスの指示通りに動けばまず間違うことはない、と。

謎解きの向こう

研究のドライブは謎解きだろう。謎は深いほど解き甲斐がある。免疫学ではよくマウスを使うが、そ

の後も私はいろいろな「難解なマウス」と格闘してきた。その一つが、京大へ戻ってから10年近く本庶教授のお手伝いをさせていただいたPD-1遺伝子破壊マウスである。私が絡むとどうしてもガン免疫へバイアスがかかるが、このマウスの解析から今をときめく免疫チェックポイントという新しいコンセプトのガン療法が生まれた(詳細は京大Research Activities Vol.4 No4参照)。私が本庶教授とこの論文を世に出してから丁度10年後の2012年に、この治療法が人のガンにめざましい効果を示すという臨床研究が相次いで米国から発表された。世界も驚いたが、何より私たちが一番驚いた。現在、PD-1チェックポイント療法は米国、欧州、日本を含むアジアで薬剤認可を受け、世界中のガン患者に使われてきている。若い頃は目の前の患者さんをどうするかで必死だったが、自分たちの発見をもとにした治療法で世界中の多くの不治といわれた病の人達の命が救われているという事実には、鳥肌が立つような感慨に打たれる。特に使命感にかられてという訳ではなかったが、これが私達を駆り立てた謎解きのはるか向こうに見える景色の一つであることを知った。本庶教授によるPD-1の発見が1992年、私たちの動物モデルによるガン治療法の提示が2002年、米国での最初のヒトでの大規模臨床報告が2012年、長い道のりである。他方、昨今では大学の研究者は「毎年のように」研究の出口(成果)をせっつかれている。

国際化とは何か

当時Barryは大統領の科学顧問やWHOワクチン部会長をつとめ世界中を飛び回っており、殆ど研究室にはいなかった。第一級の免疫細胞学者だったが、主な関心は免疫難病よりはアジアやアフリカで毎年何百万もの人を殺し続けている結核やマラリアだった。基礎免疫学研究にこだわった私は不肖の弟子ということになる。研究室とはといえば、アメリカはむろん、イギリス、イタリア、インド、中国、シンガポール、そして日本の私と、世界中からポスドクが集まって自由に研究していた。Barryはグローバル化など一言も言わなかったが、これが単にすこぶる自然だったということだろう。研究室で国籍のことが話題になった記憶は全くない、食物の自慢話を除

けば。このうち何人かとは今でも時々会って話をする。科学に国境などないし、まして国際化は達成すべき目標などでもない。世界中に同じ興味を持つ仲間や相性のいい師匠はいっぱいいるし、その中で私たちは自由に呼吸ができる。私は後先考えない奇妙な成り行きで20歳代の後半をNYの、当時はアメリカ人でも怖がったブルックスで過ごすことになったが、それもまた自然な成り行きだったのだろう。今私の研究室には、インド、フランス、中国などから多くの外国人留学生が日本人院生と一緒に研究しており、研究室の「公用語」は自然と英語である。インドとフランスからの学生はこの秋学位を取得し、ポスドクとして各々ハーバード(米国)とケンブリッジ(英国)という新たな「外国」へ旅だった。

Don't settle

私の手元に、Apple創業者の故Steve Jobsが2005年にStanford大学で行ったCommencement address(卒業式演説)がある(私はアメリカの多くの名演説の一つだと思う)。彼はそこで3つのストーリーを話している--人生のNodes(節目)とその繋がりについて(生後すぐの養子縁組み、経済的理由による大学中退、Appleでの成功・挫折と再起)、愛と喪失について、そして死について(このときすでに膵臓ガンの告知を受けている)。彼はこの感動的なスピーチの中で、大きな仕事を成し遂げる唯一の方法は自分のやっていることを愛することである、と言い、The Whole Earth Catalogue誌の最終号の背表紙の言葉 “Stay Hungry. Stay Foolish.”で演説を締めくくっている。

さて冒頭の「グローバル化」の話に戻れば、折角様々なサポートシステムが用意されているので学生諸君はとにかくがんばって留学しましょう、ということではないだろう。学生諸君が世界に自由に羽ばたきたければ今では(昔と違って)いろんなサポートが受けられますよ、ということである。自分が愛することのできる道(仕事)を探すことに国境などない。Steve Jobsの言葉を借りれば、“So keep looking until you find. Don't settle.”ということではなかろうか。

大学の動き

理事の交替等について

杉万俊夫 理事・副学長(学生・図書館担当)が9月30日付けで辞任した。

副学長が発令される

10月1日付けで、徳賀芳弘 大学院経営管理研究部教授が植田和弘 副学長(大学基金・同窓会担当)の後任として、また、山本克己 大学院法学研究科教授が林 信夫 副学長(法務・コンプライアンス担当)の後任として任命された。どちらも任期は平成28年9月30日まで。



大学基金・同窓会担当
徳賀 芳弘 (新任)



法務・コンプライアンス担当
山本 克己 (新任)

理事補が発令される

【任期：平成27年10月1日～平成28年9月30日】

産官学連携担当 松原英一郎 工学研究科教授 (新任)

博士学位授与式を挙行

9月24日(木)、百周年時計台記念館百周年記念ホールにおいて、山極壽一 総長、副学長をはじめ、各研究科長、理事補出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

山極総長から、代表者に対し学位記(平成27年5月25日付、7月23日付、9月24日付)が手渡された後、総長の式辞をもって終了した。

各分野別内訳は次のとおりである。総長式辞は以下ホームページに掲載している。

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/president/speech/2015/150924_1.html



山極総長による学位記の授与

学 位	平成27年5月			平成27年7月			平成27年9月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
博士(文学)	1	-	1	4	-	4	2	1	3
博士(教育学)	1	-	1	2	-	2	3	-	3
博士(法学)	-	-	0	-	-	0	1	-	1
博士(経済学)	2	1	3	2	-	2	3	2	5
博士(理学)	5	-	5	4	-	4	7	-	7
博士(医学)	9	2	11	9	-	9	9	3	12
博士(医科学)	-	-	0	1	-	1	-	-	0
博士(社会健康医学)	-	-	0	-	-	0	3	-	3
博士(人間健康科学)	2	-	2	1	-	1	1	-	1
博士(薬学)	-	-	0	-	-	0	-	1	1
博士(薬科学)	-	-	0	-	-	0	-	-	0
博士(工学)	10	1	11	8	1	9	41	1	42
博士(農学)	8	3	11	3	-	3	6	-	6
博士(人間・環境学)	2	-	2	3	2	5	7	1	8
博士(エネルギー科学)	1	-	1	-	-	0	1	-	1
博士(地域研究)	-	-	0	2	-	2	1	1	2
博士(情報学)	1	-	1	-	-	0	8	1	9
博士(生命科学)	6	-	6	1	-	1	1	-	1
博士(地球環境学)	1	-	1	-	-	0	6	1	7
計	49	7	56	40	3	43	100	12	112



(教育推進・学生支援部(教務企画課))

全学教育シンポジウム「京大流・未来を拓く人の育て方」を開催

9月2日(水)、桂キャンパス船井哲良記念講堂を会場とし、教職員等273名の参加を得て、「京大流・未来を拓く人の育て方」をテーマとする全学教育シンポジウムを開催した。



左から基調講演を行う山極総長、講演を行う北野理事・副学長、閉会の挨拶をする飯吉センター長

このシンポジウムは、参加者が教育について全学的な議論や意見を交わすことにより共通理解を深め、今後の教育の改善・充実に資するとともに、部局の

枠を越えた教職員の交流の場となることを目指して、平成8年から開催しており、今回で第19回目となる。

午前の部は、山極壽一 総長による「大学が直面する課題と京都大学が目指す教育」と題した基調講演の後、松下佳代 高等教育研究開発推進センター教授が10学部の特徴ある教育について、映像とともに紹介し、各学部の代表の教員が説明を行った。

午後の部は、北野正雄 教育担当理事・副学長が、「京都大学の教育改革とそれを取り巻く状況」というテーマで講演を行った。講演に引き続き、「京都大学における高大接続・高大連携の取組みについて」と題し森脇 淳 理学研究科長、「入学者選抜と特色入試」と題し木南 敦 教育担当理事補・法学研究科教授、「平成28年度からの教養・共通教育」と題し喜多 一 国際高等教育院副教育院長がそれぞれ報告



シンポジウムの様子

した。その後休憩をはさみ、「京大流・未来を拓く人の育て方」というタイトルでパネルディスカッ

ションを行った。コーディネーターは飯吉 透 教育担当理事補・高等教育研究開発推進センター長が務め、学内からパネリストとして、山極総長、北野理事・副学長、森脇理学研究科長、木南理事補、喜多国際高等教育院副教育院長、学外から、柴 浩司 大阪府立大手前高等学校長、仲 暁子 ウォンテッドリー株式会社代表取締役CEOが参加し、多角的視点での議論を行い、「京大流・未来を拓く人の育て方」への展望を示した。

今回のシンポジウムを通じて、現在の取り組みの改良、新たな取り組みの企画など、様々な形で活かされることを期待したい。

(教育推進・学生支援部(教務企画課))

第53回近畿地区国立大学体育大会に出場

第53回近畿地区国立大学体育大会が5月3日(日)から8月29日(土)までの間、行われた。11大学・17種目にわたる競技で熱戦が繰り広げられ、本学は総合成績(男子)で優勝を果たした。

各選手は日頃の練習の成果を十分に発揮するとともに、他大学との交流も深め、充実した大会となった。

総合成績(男子)	優勝	京都大学
	準優勝	大阪教育大学
	3位	神戸大学
総合成績(女子)	優勝	大阪教育大学
	準優勝	京都教育大学
	3位	神戸大学、奈良女子大学

第53回近畿地区国立大学体育大会ホームページ

<http://www.kinkoku.jp/index.html>



ハンドボールの試合の様子

(教育推進・学生支援部(厚生課))

山極壽一 総長が第3回日越学長会議に出席

9月28日(月)・29日(火)、ベトナムのダナン大学にて、第3回日越学長会議を開催し、本学から山極壽一 総長、森 純一 国際交流推進機構長、藤井滋

穂 地球環境学堂長、柴山 守 ASEAN拠点所長と関係教職員が出席した。

本会議は、第1回を2009年にベトナムのハノイ

で、第2回を2012年に本学で開催し、本学は第1回から日本側幹事校を務めている。

第3回は、ベトナム教育訓練省(MOET)からホスト校に任命されたダナン大学との共同開催とし、文部科学省の後援のもと、在ベトナム日本大使館、日本学術振興会、国際協力機構、国立大学協会の出席も得て、ベトナム側44大学、日本側28大学、計約200名が参加した。

会議は「両国の未来を担う人材の育成」をテーマとして、チャン・ヴァン・ナム ダナン大学長と山極総長による開会の挨拶で始まり、ダン・ヴィエット・ユン ダナン市人民代表議会副議長、ブイ・ヴァン・ガー ベトナム教育訓練省副大臣、柳 淳 在ベトナム日本国大使館次席公使、田浦宏己 文部科学省国際戦略分析官による来賓挨拶、横浜国立大学とダナン大学との交流協定締結式、森機構長、チャン・アイン・トゥアン MOET審議官による基調講演と、山下邦明 日本学術振興会バンコク研究連絡センター長による事業紹介が行われた。

午後には、教育、研究の分科会に分かれて「高等教育連携と質の保証」「共同研究と研究成果の社会実装」をテーマに各大学の交流事例発表と情報交換を行った。

2日目の全体会議では、森機構長およびダナン外



開会挨拶をする山極総長

国語大学長の議事進行のもと、日越協力の取り組み、将来への展望等について発表がなされた。

結びとして、山極総長より第3回日越学長会議の共同声明が発表され、本会議で提案された方向性のもと、学生交流や共同研究等、日越の更なる交流促進を実現させていくことが確認された。

また、28日(月)に山極総長、藤井学堂長ら一行7名がダナン工科大学および同大学にある地球環境学堂の現地オフィスを訪問し、同じくベトナムで地球環境学堂の現地オフィスを持つフエ、ハノイおよび地球環境学堂と遠隔会議システムで中継する4元会議を行った。各遠隔局からはそれぞれ10名以上が参加し、ベトナムでの研究・教育の活動について積極的な報告が行われた。



第3回日越学長会議出席者

(企画・情報部(国際企画課))

寸言

「文化経済大国」を目指そう

大竹 伸一

阪神淡路大震災や東日本大震災で奇しくも再評価を受けることになった日本人の精神性や行動を見てみると、ここに日本の新たな発展の鍵が隠されていると感じる。



つまり日本人は未曾有の大災害の中でも「冷静」であり、不平不満を言わないばかりか、誰のせいにもせずに「忍耐」強く我慢した。また、自分のことは差し置いて他人を思いやり、「調和」を重んじ、「譲り合い」「自己犠牲」の下、心をひとつにし、みなで助け合う「互助」と「協調」の精神を發揮した。具体的な行動例を挙げると、震災後、携帯電話がつかない状況で家族の安否を直ぐに確認したいにもかかわらず、割り込みもせず規律正しく公衆電話に列をなし並ぶ、電車が動かず帰宅難民になっても長時間忍耐強く電車の運転再開を待つ、物資が不足している状況でも略奪や強盗を行わず、冷静にコンビニエンスストアで順番を守り、きちんとお金を払い買い物をする人々の姿があった。

これら震災発生後の日本人の精神性や行動は、まさに世界に誇れる日本の強みである。

世界はモノや機能の豊かさだけでなく、「心の豊かさ」を求めように変化している。この「心の豊かさ」の実現は、モノやサービス、金銭だけではなく、精神性、価値観、生活・思考・行動様式といった無形の文化的要素が不可欠で、人々の生活に安らぎ、精神的快適性、安心感などをもたらすものでなければならない。

元来、文化と経済は両輪となって繁栄をもたらしてきた。幸い日本には、世界標準になりうる伝統・文化が数多くある。「もったいない」という価値観や思考がモノを大切にする生活様式に結びつき、エコロジーといった精神的な快適さをもたらす、省エネ

商品、保存食品、リサイクルなどの経済活動に発展してきた。また「繊細」「器用」といった価値観や才能が、小型化する行動様式に結びつき、スペースの有効利用や利便性や快適性をもたらす、軽自動車、携帯電話、収納用品などの商品に発展させてきた。関西からもインスタントラーメンやカラオケなどを創出して快適な生活を提供してきた。さらに、おもてなしの心、茶道から抹茶や緑茶を味わうこと、枯山水を鑑賞すること、醤油を使った多彩な和食文化など、日常生活で心の豊かさを提供してきた。

様々な日本文化を現代に適合させ普遍的なものとし、世界に浸透させていくことができれば、新たな市場の形成や市場そのものを拡大することが出来る。

物質的な豊かさを提供する高付加価値(高品質・高機能・高デザイン)製品・サービスの創造のみならず、生活・思考・行動様式などの無形文化を経済的価値に結びつけることが、これからの日本の持続的発展の鍵である。

文化力と経済力を融合させた「文化経済大国」を目指すことで、グローバル競争に勝つための差異化につながられる。

日本文化の源流は、日本人の心と技、「和魂和才」にある。これまでも日本人は、「和魂和才」を色濃く継承し、ものづくり日本を支えてきた。例えば、創意工夫による緩まないナットや高性能フィルムなどの工業製品、ものづくり力による海外向けにアレンジされた南部鉄器などの伝統工芸品、おもてなしの心によるきめ細かな接客サービス等、既に日本文化を源流としたオンリーワン技術を活かした製品・サービスを世界に輸出し成長を遂げている。

京都は、日本文化の原点であり、京都で学び感じたことを基本に「文化経済大国」を実現してほしいと願っています。

(おたけ しんいち 西日本電信電話株式会社 相談役、昭和46年工学部卒業)

随想

野生動物問題雑考

名誉教授 渡邊 邦夫



最近はどこに行っても、野生動物による農作物被害を耳にするようになった。20年ほど前からこうした野生動物をめぐる社会問題を議論する場になり出されるようになった。私がかげ出しの研究者だった頃は、どうやって野生動物を人間による開発の勢いから守り、種の存続をはかるかが、喫緊の課題として議論されていた。今ではいかに「害獣」を減らすか、被害を軽減して共存への道を模索するかが焦点になっている。世の移り変わりと言ってしまうとそれまでだが、やはり隔世の感は否めない。

野生動物による被害問題といっても、主に世間を騒がせているのはシカとイノシシ、そしてサルなどの限られた種であるが、それにしてもと思うほどに最近の分布拡大はすさまじい。早朝の散歩を楽しんでいても、イノシシの新しい掘り返し跡を見つけることは珍しいことではないし、時折どこからやってくるのかハナレのニホンザルに出会ったりする。野生動物が豊富に生息している国というのはいいものだと思うけれども、いやこれでは農作物への被害が深刻になるのは当たり前だと妙に納得させられる。それが一部の地域に限られているわけではなく、全国のけっこうな市街地近くにまで及んでいて、どこへ行っても電気柵が張り巡らされた田畑を見るようになった。

行政もさまざまな対策に取り組んではいるけれども、どうも上手くいっているようには見えない。成功事例は少なく、むしろ手は打っているけれども被害は年ごとに増えているというのが大半ではないだろうか。シカもイノシシも現在では年40万頭からが捕殺されているし、ニホンザルは2万5千頭におよぶ。いずれもわずか30年程度の間に数倍から10倍程度にまで増えているが、いっこうに被害は減らない。いったい何が起きているのか。なぜ今になってこんなことが出来たのか。過去の時代にはどのよう

にして斯のような事態が防がれていたのだろうかと考えさせられてしまう。

実際現場に行ってみると、「ヒト」の側の劣勢は明らかである。後継者難に悩む農林業だけではなく、中山間地の村落は多くが存亡の危機にさらされていて、とうてい激甚化する被害問題に対抗するだけの活力を維持できない。またこうした中での行政の取り組みにも限界がある。基本的にこの構図があるかぎり問題の解決は難しいのかもしれない。だがもうひとつ、対策を考える側にしてもなかなか統一した強力な施策を行える状態にはないように思える。生き物を殺すことには抵抗があり、また自然保護から愛護への思いにも根強いものがある。たとえば研究者仲間であっても各人各様、それぞれの「思い」によって対応がまったく違って来る。現場での人間模様や行政の取り組みによっても千差万別、けっこう複雑な様相を呈する。環境省は野生動物の「科学的保護管理」ということを言い出した。それを基にして多数の都道府県が特定鳥獣保護管理計画というものを作成し、実施している。ところがその内容を比較検討してみると、総論はみなほぼ同じでも、実際に行われている対策の内容となると、まったく異なる方向を向いていることも珍しくはない。特にニホンザルではそれが著しい。

純粹に科学的な議論であれば検証可能なのだが、問題は時間が限られていて現時点で考え得るベストの解決策を提示しなければならないということである。だから科学者としては自らの「先見性」をめぐって意見を闘わせることになる。ただ無意識にではあってもそれぞれの思いによって、強調する部分が180度変わってくる。だから総論が同じでも、やることはまるで異なるというようなことがおこるのだろうか。それはまだ我々の社会がそれほどには切羽詰ってはいないということを示しているのだろうか。かといって、しっかりした議論の積み上げがないと、行き着くところ、どこに走って行ってしまうのか、多少の不安を覚えないでもない。

(わたなべ くに お 平成25年退職、元霊長類研究所教授、専門は霊長類社会生態学)

洛書

人が火山に合わせるしかありません

中道 治久

こういう至って単純で当たり前のことを人は忘れるようだ。ここはインドネシア・ジャワ島東部にあるケルト火山のそばクディリにある火山観測所。2014年2月13日に噴火があり、軽石がこの観測所にも降り注いだ。大統領の写真が飾ってある大事なところの下に、今も当時の噴火前の地震の回数の表が残されている。観測所員は噴火する可能性が高まったことを確実に認識し、増え方の急激さから規模が相当なものということを読み取った。その時々火山活動の度合いに応じて、火山から人との距離をとるだけだ。噴火が迫っているので、無線やSMSでひたすらAwas(避難)! Awas! と伝えるだけだ。



観測所所員は至って陽気だ。責任者の彼の車は大音量のスピーカーを乗せたオフロードカーだ。音を鳴らしながらやってきて、所員とともに出かけて行く。きょうはどこに行くと聞いたら、ここから20km離れた町だという。そこで、噴火について住民との話し合いに行く。20kmのところでも実際に先日の噴火では影響があり、火山に対する意識は前にも増して高まったようだ。日本に比べて観測機器はもちろん貧弱だ。日本と同じく島国そして火山国だ。

私は、そもそも噴火に縁の無い研究者として火山研究キャリアがあった。しかし2年半前に噴火が続く桜島に赴任したことで状況が一変することになる。過去の研究対象は噴火未遂で終わったところだ。噴火未遂は顕著な火山活動の活発化を示す観測結果がありながらも、結局は噴火しなかったことを指す。ところが、研究で関わりのあった(ある)火山が相次いで噴火することになるとは。御嶽山、口永良部島、箱根山である。桜島は常に噴火しているが、8月に大きな噴火危機を迎えたが今のところなんともない。ここ1年火山がこれほど注目された年はなかった。日本で噴火数が急増したわけではないのである。理由は明快だ。注目された火山は人との関わりが大きいからだ。火山現象としては西之島が最も注目さ

れるべきだ。だが、そうっていないことからわかる。

火山の表情を見る(目視観測)、体型を測り(測地観測)、聴診器を当て(地震観測)、においを嗅ぎ(ガス観測)、時には火山灰を吸う(成分分析)。データがそろったところで肝心なのは火山の診断、そして、診断結果を人間社会がどう受け止めるかだ。データは嘘つかないが、火山と人との物理的距離が近いほど、どうも診断と受け止め方が怪しくなるようだ。人の都合を優先するからだ。

インドネシアでもやっているように、火山の活動の状況に人が合わせるというシンプルなことをするしかないのである。活動が高まったが噴火未遂となって終わってもいい。噴火の恐れが無くなったと判断したら、元の生活にすぐに戻ればいいだけだ。なぜなら、噴火するしない、小さな噴火で終わるかどうかはほんの紙一重であるからだ。それを無駄とは言わない。火山とのつきあい方を実地訓練してもらえたと感謝すべきだろう。幸いなことに、火山は我々に黙って噴火することはない。大きな噴火であればあるほどその前には大きく伝えてくれるのだ。それを予測や予知をしようというのがおこがましい。その前に、火山が言っていることを素直に聞けということだ。災害となるのは、人が聞く耳を持たなかっただけだろう。そして、人が火山に合わせたくなかったということだ。いや、あまりにも火山に近寄りすぎると聞こえなくなるのかもしれないし、聞きたくなくなるのだろう。また、噴火がずっとないのにつまでも避難し続けるのはこれもまた火山が言っていることを聞いていないことだろう。

噴火危機を前にして我々は同時に二つを瞬時に求められる。一つは、現在の火山活動を評価してこの先がどうなるか想定すること。もう一つは、噴火するとどのような現象と被害が想定されるかである。地球科学で京都賞を受賞されたある先生が仰った通り「人が自分の態度を事前に決められる情報を提供すること」こそが大事なのだから。これを噴火危機では常に我々は求められているし、火山の傍にいる我々もその情報を元に態度を決めているのだから。

(なかみち はるひさ 防災研究所准教授 専門は火山物理学)

話題

第8回次世代グローバルワークショップを開催

アジア研究教育ユニット(KUASU)では8月1日から3日にかけて、第8回となる次世代グローバルワークショップを、「Demographic Challenges in the Era of Global Ageing and Migration」(グローバル高齢化と移動の時代における人口学的挑戦)をテーマとして文学部新館で開催した。

ワークショップはKUASUの国際連携大学教員や本学教員による基調講演に始まり、世界16の国や地域から、大学院生・若手研究者24名が英語で研究発表を行った。取り扱ったテーマは高齢化による人口の変動や、それらが引き起こす国境をこえた移住、

社会包摂などで、参加者からは、「多様な分野の研究者からコメントをもらったことも視野を広げるうえで大変有意義であった」、「発表や質疑応答のみでなく、何気ない会話にも多くの気づきがあった」などの声が聞かれた。

3日には、日本の超高齢社会の現実をより深く知るために、フィールドトリップを開催し、シルバー人材センター二条城事務所「ばあばサービス、ピノキオ」、シルバー人材センター北部支部、地域密着型総合ケアセンター「きたおおじ」、高齢者福祉施設「紫野(むらさきの)」などを訪問した。



参加者の集合写真

(学際融合教育研究推進センター)

第3回高校生のための夏期セミナー「漢字文化への誘い」を開催

人文科学研究所では8月7日(金)に東アジア人文情報学研究センター大会議室で、第3回高校生のための夏期セミナー「漢字文化への誘い」を開催した。

本セミナーは、将来を担う高校生に漢字の面白さ、奥深さをわかりやすく紹介し、漢字文化全般に関心を深めてもらおうと企画したもので、関東から近畿まで21名の高校生が参加した。

富谷 至 東アジア人文情報学研究センター長の挨拶に始まり、「時には、書物にかんして語ろう」をテーマに、永田知之 准教授が「読む・書く・写す・



セミナーの様子

印刷する一漢字ばかりの本ができるまで」の講演を行った。講演後、センターの見学を行い、最後の座談会では熱心な質問や議論が行われた。

参加者からは「中国の貴重な書物に触れることができるとても勉強になりました」、「書物自体の形の

移り変わりを考えていくという講演内容は大変興味深かったです」、「京都大学で学び、ここで研究したいと思いました」等の感想が寄せられた。

(人文科学研究所)

2015年国際土壌年記念巡回展『土ってなんだろう?』を開催

9月2日(水)から9月13日(日)まで総合博物館において、国際連合が定めた国際土壌年2015を記念して、地味けどすごい土の魅力を紹介する巡回展示『土ってなんだろう?』を開催した。本展は埼玉県立川の博物館が主催し、総合博物館のほか、地球環境学堂、農学研究科、一般社団法人日本土壌肥料学会および日本ペドロロジー学会が共催した。

私たち人間を含め多くの生き物の命を様々な形で

支えている「土」の魅力を紹介した本展示には1640名の入場者があった。会期中には、久馬 一剛 京都大学名誉教授による特別講演「日本の土壌学はどのように始まったのか」を開催し、約70名の参加者を得たほか、「光る泥団子作りに挑戦」企画には、子どもを中心に約160名が参加した。

(大学院地球環境学堂・学舎)



会期中に実施した展示解説

(大学院地球環境学堂・学舎)

サマースクール「東南アジアの再生可能エネルギー開発」の研修をチェンマイ(タイ)で実施

8月10日(月)から21日(金)までタイのチェンマイ大学(CMU)で大学の世界展開力強化事業(「人間の安全保障」開発を目指した日アセアン双方向人材育成プログラムの構築)による、サマースクール「東南アジアの再生可能エネルギー開発」の研修を行い、

工学部・農学部・法学部の学生15名が参加した。

この研修では、CMUの学部学生とともに、再生可能エネルギーについての講義と、小水力発電所、地熱発電所、バイオガスプラント、バイオマスプラントへの訪問を通して、各種エネルギーの基礎知識

やタイにおけるそれらの利用状況、今後それらの利用を拡大するための社会的・経済的・政治的・技術的諸課題について学んだ。

チェンマイでの臨地研修を通して、エネルギーと

環境についての生きた知識を得ることができた。本研修は本学・CMU双方の学生にとって貴重な経験となった。



修了式で修了証書を手にする参加者

(学際融合教育研究推進センター)

第70回京都大学原爆災害総合研究調査班遭難者の慰霊の集いを開催

昭和20年、原子爆弾が投下された広島で被爆者調査、診療にあっていた「京都大学原爆災害総合研究調査班」は、同年9月17日に西日本を襲った枕崎台風による土石流の被害にあった。そのとき犠牲となった方々を慰霊する集いが、9月12日(土)広島県廿日市市宮浜温泉(旧大野町)の慰霊碑前にて営まれた。



慰霊碑への献花



追悼の言葉を述べる山極総長

調査班は、原爆投下直後に軍の依頼を受けて医学部と理学部を中心とした教員、学生、看護婦らで結成され、9月3日からは大野村(現廿日市市)にある大野陸軍病院を拠点に原子病患者の治療および病理学的研究調査が約50名になった調査班員により進められたが、折しも「枕崎台風」と呼ばれる大型台風による大規模な土石流で班員11名を含む156名が死亡した。

慰霊は、例年被害のあった9月17日の直近の土曜

日に自由参拝で行われているが、本年は5年に1度の式典開催の年にあたり、遺族をはじめ関係者を含む、約70名が参列した。

式典では、犠牲者への黙祷の後、山極壽一 総長、上本伸二 医学研究科長、森脇 淳 理学研究科長、木村 徹 芝蘭会広島支部長、眞野勝弘 廿日市市長が追悼の言葉を述べ、遺族代表として眞下芳夫氏が言葉を述べた。その後、山極総長、眞野廿日市市長

をはじめ参列者全員が献花を行った。式典の最後には、山極総長から本慰霊の集いに対し永年ご尽力いただいている廿日市市長、廿日市市議会議長、廿日市市大野支所長へ感謝の意をこめて感謝状が進呈された。

来年は9月17日(土)に自由参拝形式にて第71回慰霊の集いが開催される予定である。

(大学院医学研究科)

第1回京都こころ会議シンポジウム「こころと歴史性」を開催

9月13日(日)、京都ホテルオークラにて第1回京都こころ会議シンポジウム「こころと歴史性」を開催した。4月に発足した「京都こころ会議」の第1回シンポジウムとして、こころの歴史性に焦点をあて、5人の講演者がそれぞれの専門分野から講演、討論をおこない、400名を超える参加者が来場した。

はじめに、吉川左紀子 こころの未来研究センター長、稲盛和夫 公益財団法人稲盛財団理事長の挨拶があり、牛尾則文 文部科学省研究振興局学術機関課長より祝辞を頂いた。

続いて講演がおこなわれ、中沢新一 明治大学野生の科学研究所長が「こころの構造と歴史」、河合俊雄 こころの未来研究センター教授が「こころの歴史的内面化とインターフェイス」、広井良典 千葉大学教授が「ポスト成長時代の『こころ』と社会構想」、下

條信輔 カリフォルニア工科大学教授・こころの未来研究センター特任教授が「こころの潜在過程と"来歴"～知覚，進化，社会脳」、山極壽一 総長が「こころの起源——共感から倫理へ」と題してレクチャーした。その後、講演者による総合討論がおこなわれ、鎌田東二 こころの未来研究センター教授が総括コメントを提供し、湊 長博 研究担当理事・副学長による閉会の言葉でシンポジウムは終了した。

今回おこなわれた第1回京都こころ会議シンポジウムの講演内容は、書籍として出版される予定。また、2016年には「国際京都こころ会議」を開催する。

なお、シンポジウム詳細はこころの未来研究センターホームページに掲載している。

<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/news2/2015/09/1509kokorokaigi.php>



シンポジウム全景



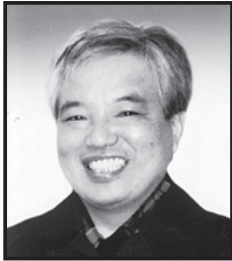
総合討論の様子

(こころの未来研究センター)

訃報

このたび、稲垣省五^{いながきしやうご}名誉教授、卯本重郎^{うもとじゅうろう}名誉教授、高棹琢馬^{たかさおたくま}名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

稲垣 省五 名誉教授



稲垣省五先生は、7月9日逝去された。享年67。

先生は、昭和45年大阪大学工学部電気工学科を卒業後、京都大学大学院理学研究科修士課程、同博士課程を修了して、昭和52年11月に京都大学理学博士の学位を取得された。昭和53年10月京都大学理学部助手に採用され、平成3年助教授に昇任、平成6年教授に昇任された。平成19年に退職され、翌年名誉教授の称号を授与された。

先生は長年にわたって理論天文学、特に球状星団の力学的進化の解明に努められ、幅広い分野において研究論文と著書を公表している。球状星団とは数

十万もの恒星が集まった集団をいい、多数の星が互いに複雑に重力相互作用しているため、そのふるまいを理解するのは極めて困難であることが知られている。先生はこの難問に真っ向から取り組み、回転する星団が臨界温度以下で重力不安定により崩壊する現象の発見や、自己重力多体系の振る舞いを簡便に記述する一般変分原理の開発で、世界的に知られている。また先生は学生の研究指導に熱心に取り組み、優れた人材を輩出し、学問の進歩に貢献された。本学在任中には宇宙物理学教室の主任として、教室の運営に取り組みされた。また平成9年に京都市で開かれた国際天文学連合総会の際には、現地の運営委員として会議の成功にご尽力された。

(大学院理学研究科)

卯本 重郎 名誉教授



卯本重郎先生は、7月29日逝去された。享年85。

先生は、昭和28年3月京都大学工学部電気工学科を卒業、同31年3月同大学院研究奨学生前期(工学)を修了、同33年3月同後期を修了し、同36年3月工学博士(京都大学)の学位を授与された。昭和33年4月京都大学工学部助手に採用され、助教授を経て、同42年1月教授に就任、工学部電気工学科電磁気学講座を担当された。平成6年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、平成6年4月から同14年3月まで福山大学工学部電子・電気工学科教授を務められた。

先生は、電磁気学、電磁流体力学、電気回路などにおける基礎方程式の数値解析法の研究開発に従事され、その解析法を用いて、電力系統における進行波、電気機器の性能向上、電磁流体(MHD)発電などに関する研究を行い、多くの優れた業績を残された。主な著書に『電磁気学』、『基礎電気数学』等がある。

これら一連の教育研究活動により、平成21年11月、瑞宝中綬章を受けられた。

(大学院工学研究科)

高 棹 琢馬 名誉教授

高棹琢馬先生は、8月30日に逝去された。享年81。

先生は、昭和31年3月京都大学工学部土木工学科を卒業、同33年3月に同大学院工学研究科修士課程を修了、同博士後期課程を経て、同35年4月同大学防災研究所助手、同36年4月同助教授、同39年3月同大学工学部助教授に配置換え、同47年6月同教授に昇任され、土木工学科水工計画学講座を担当された。平成9年3月停年にて退職され、同年4月京都大学名誉教授の称号を授与された。

先生は、水文学および水資源学に関わる独創的かつ画期的な研究業績を挙げられ、土木工学の水工学分野の進歩に多大な貢献をなされるとともに、土木学会水理委員会委員長、水文・水資源学会会長を歴任され、水工学研究の推進・活性化および後進の教育・指導、多方面で活躍する人材育成に貢献された。

先生は、洪水流出系の分析・同定・予測に関する研究に関して、山地流域における雨水の挙動を力学的に究明され、物理的な洪水流出予測手法の基礎を築かれた。これらの研究は、その後の国内外の組織的研究よりも20年以上前に行われたもので、その成果は水文学の発展に大きく貢献したものとして国内外で高く評価されている。また、先生は、河川・水資源システムの計画・管理に関する研究を創始され、洪水被害軽減のための技術開発研究に成果を挙げられた。これらの成果は、洪水流出系の分析・同定・予測に関する研究成果と合わせて、人間・社会システムと水文・気象システムとの相互作用を解明しようとする水文学・水資源学の新たな研究領域の展開の端緒となった。これらの業績により、水文・水資源学会功績賞、平成25年11月には瑞宝中綬章を受けられた。

(大学院工学研究科)